

## 市役所が、まちなみの形成とにぎわいの創出、及び、市民協働の場の創出に寄与する、新たな空間モデルの提示

正会員 森 民 夫 殿  
正会員 隈 研 吾 殿  
森 本 千 絵 殿

「アオーレ長岡」は、屋根付き広場「ナカドマ」を中心に、市庁舎、議会、多目的アリーナ、市民交流スペースなどの機能空間が、有機的に連携化された複合公共建築である。長岡駅とダイレクトにアクセス可能な中心市街地に立地し、商業・業務施設などが周辺を取り囲むような敷地にある、いわば、ファサードのない「街なか庁舎」となっている。

利用者が年間 150 万人にのぼり、視察者が全国から殺到しており、審査で訪れた真冬の日においても、開放された「ナカドマ」やアリーナで、多くの市民がくつろぎ、生き生きと交流する姿は大変印象深かった。雪国における、市民の活発なコミュニケーションが展開する交流空間が出現していた。また、周辺のまちなみとも調和した低層の空間構成も心地よいものがあり、周辺環境と景観上もマッチしている。

この複合公共建築は、都市のにぎわいを創出し、都市との景観共生に寄与する新たな空間となっているが、立地性、敷地性、建築空間構成の点からも、従来の庁舎とは大きく異なった新たな建築プログラムを作り上げたことが大きな要因といえよう。それは、単に設計者の空間計画力やデザイン力によるものだけではなく、発注者の企画立案力や市民協働のプロセス化など多様な役割を担う人材がシームレスに活動を積み重ねた結果だと認められる。さらには、それぞれの役割での業績も特筆に値するものであり、その具体的活動は下記の点に集約される。

### (1) 企画構想段階での 21 世紀型シティーホールを目指した新たなプログラムの策定

発注者（市長）が企画構想段階で、本プロジェクトの目的とまちづくりを見据えた総合計画をしっかりと立案したことは特筆される。中でも、コンパクトシティの実現に向けて中心市街地の活性化を計るための公共施設（特に市庁舎）の役割の重要性を強く意識したこと、また、市庁舎の一部の機能を分散させ、まちなみの景観とにぎわいの連続性を意図したこと、さらに、屋根付き広場を市民交流の中心施設とすることを盛り込むなど、未来型のシティーホール像を目指した新たなコンセプトを策定したことは評価できる。

### (2) 設計段階での「ナカドマ」を中心とした、新たな複合公共施設のあり方の具現化

設計者は、市民交流の拠点である屋根付き広場を「ナカドマ」として具現化し、その「ナカドマ」を中心に、市庁舎をはじめ、議会、多目的アリーナ、市民交流拠点も積極的に低層階に設け、市民と距離のない魅力的空間構成とした。「ナカドマ」に重層的に設けられた、市民のコミュニケーションを可能とするオープンデッキや大きく開放できるアリーナは、活発な交流空間となっている。高い計画力とデザイン力は、本プロジェクトのコンセプトを象徴的、機能的に具現化していると評価できる。

### (3) 市民協働の実践

設計、建設プロセスで、度重なる「ワークショップ」による市民と建築の一体化プロセ

スや「アオーレ」のシンボル化など多くの分野でのコミュニケーションデザインを通じて、市民と協働で作りに上げるという、時代が求める公共建築のあり方を実践している。また、竣工後において、市民ネットワーク組織が中心となり、市民交流の事業企画や施設運営を市民が自ら担うという、積極的活動を展開していることも注目される。

以上のように、今日の地方都市の中心市街地の衰退が顕在化するなかで、「アオーレ長岡」は地方都市再生における、これからの市庁舎のあり方を示す魅力的空間モデルを提案している。

よって、ここに日本建築学会賞を贈るものである。